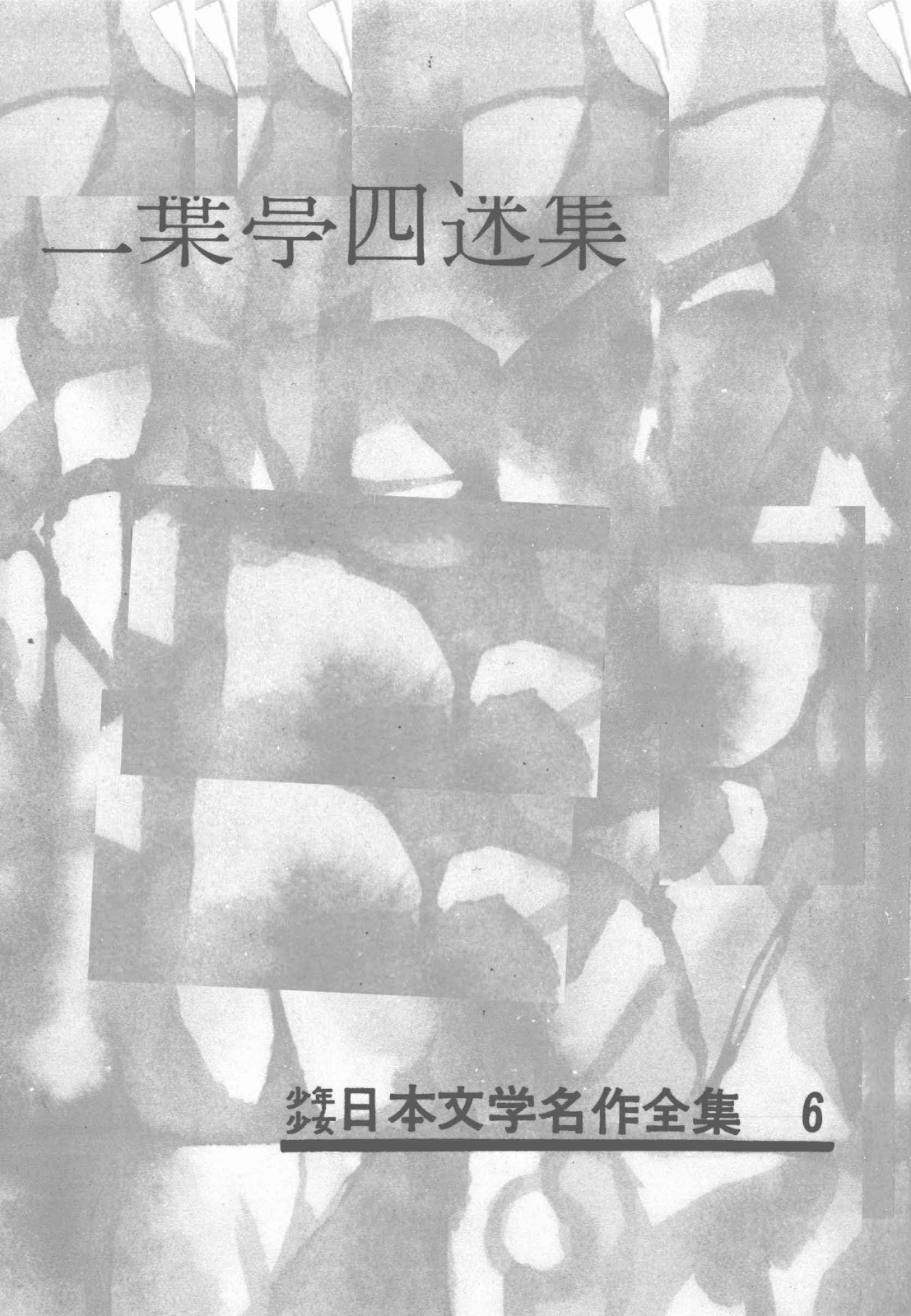


少女
少年
日本文学名作全集



6



一葉亭四迷集

巖谷小波 日本文学名作全集 6

少年少女のための 日本文学名作全集 6

二葉亭四迷集

昭和三十五年二月

初版発行

価 二五〇円

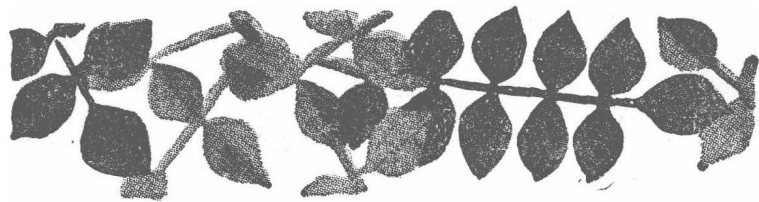
発行者 大井 徳 三

印刷 光印刷株式会社

製本 石毛製本所

東 西 五 月 社

東京都千代田区神田神保町二ノ二
振替東京三四〇三〇電(33)五七三三



この本を読む人に

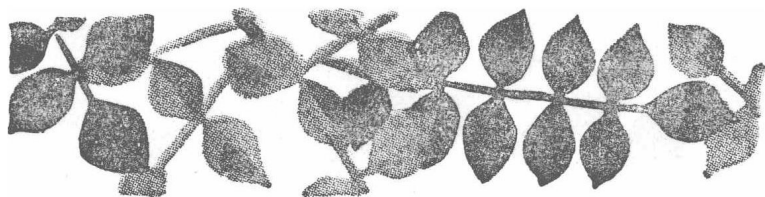
みなさんは、小学校も上級生となり、あるいは中学にすすむとともに、それまで親しんできた童話とか、児童読物などに、あきたりなくなるでしょう。

そしてさらに、世のなかのことや、人々のことをつつこんで書いたものを、読みたいというのぞみをおこすにちがいありません。

小説や戯曲や、詩歌——こうした文学書がそののぞみをはたしてくれます。すぐれた文学作品は、人生の真実や、美をありありとえがきだしてくれます。みなさんはそれにしたしむことによって、心を豊かにし、また美しくすることが出来ます。しかし、こうした文学作品の多くは、大人のために書かれたものです。年若いみなさんにとつて、十分には分りにくいものもあるわけです。そこで、それらのなかから、みなさんが読むのにふさわしいものをえらびだす必要があります。

この本には、明治・大正・昭和の三代をかざるすぐれた作家たちの代表的作品のなかから、みなさんにふさわしいもの、ぜひ読んでほしいものと思われるものを、えらんでのせました。





その作品も、できるだけ全篇をおさめるようにして、えらびましたが、非常に長い作品やもつと大人になってから読んだ方がいいという部分をふくんだものは、その一部をとつてのせてあります。しかしそのとりかたも、その作品の味わいや、特長もよく分るように工夫してあります。

また、学校で教わらないむずかしい漢字はかなに改めたり、かつこのなかにその意味を記したりして、したしみやすいようにしました。かなづかいも現代かなづかいになおしました。さらに、非常に今日とちがった文体で書かれたものは、もとの文章の味をこわさないように、現代文に書きあらためたものもあります。

巻末には、それぞれ、解説を加えました。この解説も、その作者にくわしい作家や、評論家たちが、たいへん親切に、また興味ふかく書いて下さっているので、作品を読むとおなじように、きつとみなさんの心をひきつけてくれると思います。

監修者 佐藤 春夫

伊藤 整

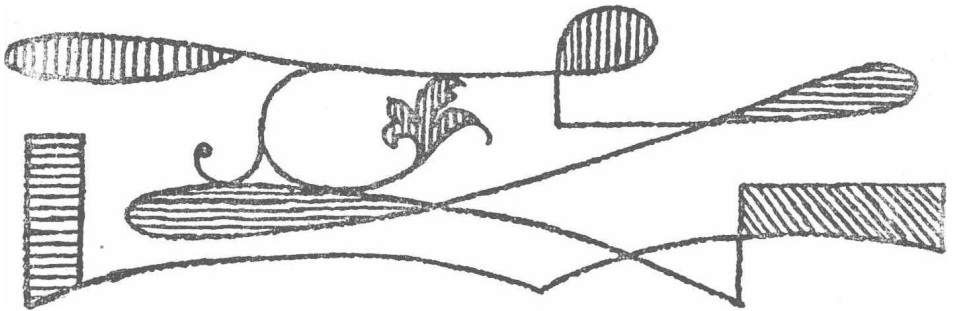
福田 清人



目次

平	凡(抄)		七
おいたち		壺	
肖像画		壺	
入露記		一罍	
露都雑記		一罍	
エスペラントの話		一罍	
余が言文一致の由来		一罍	
解説・二葉亭四迷の人と作品	福田 清 人		

装 幀・池田仙三郎
カッ ト・大井佑子



二^{ふた}

葉^は

亭^{てい}

四^し

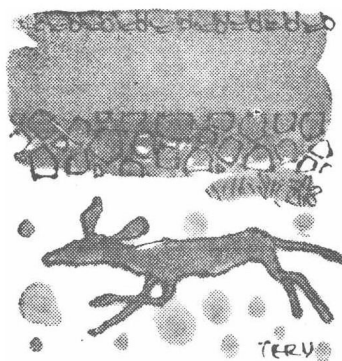
迷^{めい}

集^{しゅう}

平

凡

(抄)



子供の時分のことともうたいわすれてしまったが、不思議なもので、覚えていることだと、はつきりときのうのことにように思われることもある。中にもこればかりは一生目の底にしみついてわすれられまいと思うのは、十のとき死に別れた祖母の顔だ。

今でも目をねむると、すぐまぎまぎと目の前にうかぶ。面長の、老人だから無論しわは寄っていたが、しまった口もとで、段鼻で、なかなか上品な顔つきだったが、目が大きな目で、女にはきつすぎるほどけんがあつて、古屋の——これがわたしのうちの姓だ——古屋の隠居の目といったら、ずいぶん評判の目だったそうだ。なるほどそういえば、何か氣にいらぬことがあつて祖母が白目でジロリとにらむと、子供心にもなんだか無氣味だったような覚えがまだある。

たいていの人は氣象が目へ出ると言う。祖母がやつぱりそれだった。まったく目つきのような氣象で、勝気で、するどくて、よく何かに氣のつく、口も八丁、手も八丁という、一口に言えば男まさり……まあ、そういう私たちの人だったそう、——わたしは子供のことでい

三

わたしは地方生まれだ。戸籍をならべてもしかたがないから、ただ某県の某市としておく。そこで生まれてそこで育ったのだ。

つこうむちゅうだったが。

生長後親類などの話で聞くと、それというがいくぶんか境遇ききぐうのしからしめたところもあつたらしい——というのは、早く祖父に死なれてわかいときから後家ごけをおししてきた。後家という者はいつの世でもとかく人にかげ口言われがちの、わりの悪いものだから、勝氣の祖母はこれがくやくしてたまらない。それで、なんの、女でこそあれ、と氣を張る。氣を張って油断をしなかったから、一生人にうしろ指をさされるような過失はなかったかわり、あまり人に愛しもされずに年をとつてしまつて、父の代となつた。

父は祖母とはまるでちがつていた。どうしてこの人の腹はらにこんな人がとあやしまれるほどの好人物こうぶつで、顔もさっぱり似ていなかった。大きな、わらうと目もとに小じわの寄る、ふつくりしたいかにもあいきょうのあるまる顔で、なりも大がらだったが、どこかまるみがあり、心もそのとおりかどがなかった。快活で、わだかまりがなく、話がすきで、碁碁がすきで、ひまさえあれば近所をうち歩き、大きなくしゃみをじまんにするほどの罪のな

い人だった。祖父がやつぱりそうであつたというから、おおかたその氣象を受けついだのであらう。

父はこんな人だし、母は——わたしの子供の時分の母は、手ぬぐいを姉様かぶりにしてたすきがけでよくクレ働く人だった。そのころのことをだれに聞いても、みなおつかさんはよくしんぼうなすつたとばかりで、その他に何も言わぬから、わたしの記憶ききに残るその時分の母は、いつまでたつてもやつぱり手ぬぐいを姉様かぶりにして、たすきがけでよくクレ働く人で、格別どういう人ということもない。

こういう家庭だったから、自然祖母が一家の実権をにぎつていた。家内じゅうのこと一から十まで祖母の方寸にさばかれて、母は下女かなんぞのように追い使われる。父もいっそう家事には関係しないで、形式的に相談を受ければ、ようがしう、とばかり言っている。そう言っていないと、祖母のきげんが悪い、めんどうだ。

母方のおじで在方ざうで村長をしていた人があつた。どうしたのだから、祖母とは仲悪なみで、死後まであまりよくは言わなかったが、何かの話のついでに、おっかさんもおば

あさんにはずいぶんなされたものだよ、とわたしに言ったことがある。なるほどおりおり母が物かげでないといると、いつも元気な父がそのときばかりはこまった顔をして、何かひそひそ言っているのを子供心にも不審に思ったことがあったが、それがおじのいうおばあさんになかされていたのだったかもしれない。

とにかく祖母はこのとおり気むずかし屋であつたが、その氣むずかし屋の、死んだあとまでうわさに残るほどの祖母が、どういふものだから、わたしにかかる、からいくじがなかった。

四

なんで祖母がわたしにかかる、いくじがなくなるのだから、それはわたしにはわからなかつた。が、とにかくいくじのなくなるのは事実で、評判の氣むずかし屋が、どうにでもわたしの思うようになってしまふ。

まず何かほしい物がある。それもない物ねだりで、あけるけつこうな干菓子ひがしはいやで、ない一文菓子もんがしがほしいなどと言いだして、母にねだるが、許されない。祖母にね

だる、ちょっとしるる、首つ玉へかじりついて、ようよう二三度鼻声であまられる、と、もう祖母はなまこのようになって、お由——母の名だ——あんなに言うもんだから、買つてきておやりよ、という。祖母の声がかりだから、母も不承不承立って、雨ふりでもわたしの口のお使いに番傘ばんがさかたげて出かけようとする。こうなると、さすがの父ももうわらつてばかりはいられなくなつて、こごとを言う。わたしがなく、祖母のきげんが悪い。「こんな小さい者をそんなにいじめて育てて、もしか俊坊しゅんぱうのようなことにでもなつたら、どうおしだ？　かわいそうじゃないか。」

というのが口切りで、ボツリボツリと始める。俊坊しゅんぱうというのはわたしの兄で、わたしも虚弱きよじやくだつたが、やつぱり虚弱で、六つのときとられたのだそうだ。それも急性胃カタルでとられたのだと言うから、ことによると祖母がかわいがりがかしに口をつつしませなかつたあたりかもしれない。しかし虚弱きよじやくな子は大食させつけるとたつしやになると言われて、そうかなと思ふほどの父だから、祖母の矛盾むじゅんには氣がつかない。やつぱりありふれたそうわ

がままをさせつけてはくらのところで切りぬけようとする。祖母もそれはそう思わぬでもないから、内々自分が無理だと思っただけに激する、ことばがあらくなる。もうこの上おこらせると、また三日も物も言わなかつたあげく、ふいとうちを出て在の親類へ行つたきり帰らぬというさわざも起りかねまじいけしきなので、父はだまつてしまふ。母もだまつて出てゆく。と、もう二十分もたつと、わたしが両手にまめねじを持つてこおどりして喜ぶ顔を、祖母がながめてはくはくすることになつてしまふ。

こうしてわたしの小さいけれど際限のない欲が、いつも祖母をおしてとげられる。それは子供心にもうすすのみこめるから、自然家内じゆうでわたしのいちばんすきなのは祖母で、おばあさんおばあさんとあとをしたう。なんとなく祖母を味方のように思っているから、祖母が内にいるときは、わたしはさんざんわがままを言つて、悪たれて、したいざんまいをしちらすが、るすだと、いじけるのではないが、よっぽどおとなしくなる。

そのくせわたしは祖母を小ばかにしていた。なんと

く奥底が見すかされるから、祖母が何と言つたつて、ちつともこわくない。

それをまた勝氣の祖母がなんとも思っていない。かえつてばかにされるのがうれしいように、人が来ると、その話をして、にくいやつでございまずと言つて、ほくほくしている。

両親もそれは同じことで、さんざんわたしになやまされながら、やつぱりなんとも思っていない。ただかげでおばあさんにもこまると、おばあさんのぐちをこぼすばかり。

わたしはどつちへ回つても、やつぱりいい子だ。

五

親ばかと一口に言うけれど、親のばかほどありがたいものはない。祖母はもちろん、両親とても決してばかではなかつたが、そのばかでなかつた人たちが、わたしのためにはばかになってくれた。もつたいたいと言わずにはいられない。

わたしになんのとりえがある？ 親が身の油をしぼつ

て得た金をわたしの教育におしげもなくかけてくれたのは、わたしをあつぱれ一人前の男に仕立てたいがためであつたらうけれど、わたしの今びようたる腰弁当で、うき世のかたかげにひそんでいる。わたしが生きていたとて、世に寸益もなければ、死んだとて妻子のほかに損を受ける者もない。世間から見ればあつてもなくてもよい余計な人間だ。財産なり、学問なり、技能なり、何か人よりも余計に持っている人は、その余計に持っている物をさしはさんで、傲然としてそらうそぶいていても、人はみなその足下に平伏する。わたしのように何も無い者は、生活につかれて道ばたにたおれていても、たれひとりふり向いて見てもくれない。みな素通りしてささささ行ってしまう。たまたま立ち止まる者があるかと思えば、つらつら見て、金持なら、うう、びんぼう人だと言う。学者なら、うう、無学なやつだと言う、詩人なら、うう、俗物だと言う、そうしてささささ行ってしまう。平生最も親しいらしい顔をして親友とかなんとか言っている人たちでもこうなると寄つてたかつて、てんでんに腹さざわたしの欠点をかぞえたてて、それできみはこうなつ

たんだ、自業自得だ、あきらめたまえあきらめたまえと三度回向して、あちら向いてささささ行ってしまう。わたしはこういう価値のない平凡な人間だ。それを二つとないたからのように、人にうしろ指をさされてまでも愛してくれたのは、生まれて以来今日まで何万人となく人に出会つたけれど、その中でただ祖母と父母あるばかりだ。えらい人はこれを動物的の愛だとか言つてけなされるけれど、平凡なわたしの身にとつてはこれほどありがたいことはない。

もしわたしの親たちにいわれる教育があつたら、こうはなかつたらう。必ず、動物的の愛なんぞはどこかのすみにそつとしまつておき、例の靈性の愛とかいうものをつぎ出してきて、うす気味悪い上目をつかつて、天からぶらさがつたあやふやな理想の玉をながめながら、親の權威をかさにきぬ顔をしてかさにきて、そこんところはていさいよくわたしをある形へおしこもうとたくらむだろう。わたしは子供の天性のままに、そんなふやけた人間が、古本なんぞと首つ引きして、道楽半分にしらえた、そのくせむやみにきゆうくつな形なんぞへはいる

ことをこぼんで、すきを見てにげ出そうとする。どつこととつらまえていやがる者を無理無体に、シヤモをとりかごへおしこむようにおしこむ。わたしは形の中で出ようとよく。知らん顔している。ないて、わめいて、ひつかいて出ようとする。知らん顔している。だまして出ようとする。その手にのらない。百計つきて、しようがないと観念して、性を矯め情を矯め、生きながらで、（木で人形）のような生氣のない人間になつてしまえば、親たちははじめて満足して、ようやく善良な傾向が見えてきたという。世間のいわゆる家庭教育というものはみなこれではないか。わたしはさいわいにして親たちが無教育無理想であつたばかりに、形におしこまれるうきめのがれて、野育ちに育つた。野育ちだから、生来具有の百の欠点を臆面もなく（りもせか）さらけ出して、いわゆる教育ある人たちをひんしゆくせしめた（顔をしめ）けれども、そのかわり子供時分は、今のように矯飾（みえをはつて）はしなかつた。みんな無教育な親たちのおかげだ。ありがたいことだと思ふ。真にありがたいことだと思ふ。

しかし内ひろがりの外すばまりとむかしからよく俗人

が言う。哲人の深遠な道理よりも、詩人の徹底した見識よりも、平凡なわたしどもの耳にはこのほうが入りやすい。不思議なことには、無理想の俗人の言うことはみないきて聞える。

わたしがやっぱりその内ひろがりの外すばまりであつた。

六

内ン中のあわびッ貝、外へ出りやしじみッ貝、と友だちにはやされて、わたしはくやしがつてよくないたづけが、しかしまったくそのとおりであつた。

どういうものだか、内でおばあさんがなめるようにしてかわいがつてくれるが、いつこううれしくない。かえつてうるさくなつて、出るなとめるそでの下をくぐつて外へかけ出す。

しかし一步門外へ出れば、もううき世のあらい風がふく。子供の時分のそれは、どこにもあるいじめッ子というやつだ。わたしの近所にもそれがいた。

勘ちゃんといって、わたしより二つ三つ年上で、しい

ッ鼻びなの、色のまっ黒けな子だったが、こういうのかぎ
 ってらんぼうだ。親父おやじは郵便局ゆうびんきょくの配達かなんかで、大酒
 飲みで、おふくろはおひきずりときているから、いつも
 かぎざきだらけの着物を着て、かかとの切れたひやめし
 ぞうりをつつかけ、かた手にびんぼうどくりをさげ、子
 供のくせにびろうなはやり歌を大声でうたいながら、飛
 んだり、はねたり、曲まががけというのをやりやり使にゆく。
 しじゅう使にばかり行ってもいなかっだろうが、わたし
 は勘かんちゃんのことを思い出すと、なぜだかいつもその使
 に行くすがたを思い出す。

勘かんちゃんはどうちでは何ももらえぬから、人が何か持つ
 てさえいれば、きつとほしがって、卒直におくンと言
 う。きげんよくやればよし、いやだとかぶりをふると、
 あごをつき出して、いいよいいよと言う。うすきが悪く
 なってやろうとするが、もう受け取らない。いいよ、く
 れないと言ったね、いいよと、そればかりをくりかえし
 て行ってしまう。なんとなく気になるが、子供のことだ、
 遊びにほうけてわすれていると、いつのまにか勘かんちゃん
 が使の帰りにどこかでへびの死んだのを拾って来て、そ

つとうしろからしのび寄って、いきなりピシャリとたた
 きつける。ワツとなき声あげてこちらにはにげだす、その
 うしろすがたを勘かんちゃんは白目で見送って、「ざまア見
 やがれ！」

わたしはさんざんこの勘かんちゃんにいじめられた。はじ
 めこそくやしがつてむしゃぶりついてもみたが、勘かんちゃ
 んはけんかの名人だ。すぐと足がらかけておしたおして
 おいて、馬乗りに乗ってピシャピシャぶつ。わたしには
 おばあさんがついているから、内では親にさえめつたに
 ぶたれたことのない頭だ。そのたいせつにせられている
 頭を、勘かんちゃんはえんりよせずにピシャピシャぶつ。

一度ひどいめにあつてから、わたしは勘かんちゃんがこわ
 くてこわくてならなくなつた。勘かんちゃんがそばへ来ると、
 もうわたしはおどおどして、くれと言わないうちから持
 ってる物をやり、勘かんちゃん、あの、賢けいちゃんがね、おま
 えのことをどろぼうだつて言つてたよと、余計なことま
 で告げ口して、つとめてごきげんを取っていた。こうし
 ていけばたいいは無難だが、それでもときどきなんの
 理由もなく、通りすがりにたいいせつの頭をコツリとやっ

て行くこともある。

外はおもしろいが、勘ちゃんがいやだ。といって、内でおばあさんとにらめっこもつまらない。そこで、おとなりのお光ちゃんにお向こうのお芳ちゃんをよんでくる。お光ちゃんはそっぽのおでこでかっぱのような子だったけれど、お芳ちゃんは色白のすずを張ったような目で、いい子だった。わたしはままごとでお芳ちゃんのどんな様になるのが大スキだった。おたばこぼんのお芳ちゃんが始めてくさって、あなた、ご飯をおあがなさいなど言う。アイとわたしは返事をする、アイじゃおかしいわ、ウンというんだわ、と教えられて、じゃ、ウンと言って、おかしくなつて、ついわらいます。このほうが勘ちゃんに頭をぶたれるよりよっぽどおもしろい。それに女の子はこましくくれているから、子供でも人のうちだとえんりよする。わたしひとりいばつていられる。まちがってけんかになつても、きつと相手がなく。そうすればおばあさんがあやまつてくれる。

女の子と遊ぶのは無難でおもしろいが、しかし毎日遊ぶにきてくれない。すると、わたしはたいくつす

るから、平地に波瀾を起して、すねて、じぶくツて、大なきにないて、そうしておばあさんにごきげんを取つてもらう。

七

……が、待てよ、なんば自然主義だと言って、こうどうもダラダラと書いていた日には、三十九年の半生を語るに、三十九年かかるかもしれない。もう少しはしよう。で、唐突ながら、祖母は病死した。

そのときのことは今に覚えていたが、いつものつもりで何心なく外から帰つてみると、母がみょうな顔をして奥から出て来て、いつになく小声で、おまえは、まあ、どこへ行つていたい？ おばあさんがおなくなんなすつたよ、という。おなくなんなすつたよがちよつとわからなかつたが、死んだのだと聞くと、びっくりすると同時に、急になんだかおつかなくなつてきた。無論まだ死ぬということがどんなことだかよくはわからなかつたが、ただなんとなくこう奥の知れぬまっくらなあなのような所へはいることのように思われて、日ごろからおつか